

# 大人計画 ウーマンリブV.O.I.S NICKKEY'S SEX HUNTER

1998年5月20日〜31日 新宿シアタートップス

キャスト  
ムツオ……………松尾スズキ  
カツエ……………伊沢磨紀  
ケンゾウ……………山本密  
ガンジロウ……………皆川猿時  
アキヨシ……………宮藤官九郎  
ニセコ……………猫背椿

スタッフ  
作・演出……………宮藤官九郎  
舞台監督……………福澤諭志十五福団  
照明……………佐藤啓  
音響……………半田充(MMS)  
衣裳……………田中亜紀  
舞台美術……………加藤ちか  
写真撮影……………滝本淳助  
宣伝美術……………吉澤正美  
イラスト……………篠崎真紀  
演出助手……………大堀光威、佐藤涼子  
衣裳助手……………戸田京子  
大道具製作……………CICOM(有)オサフネ製作所  
小道具……………高津裝飾美術(株)  
制作助手……………河端ナツキ  
制作……………長坂まき子

## あとがき

監禁されてる女の子が、監禁されてるのに相手にされてないっていうのは面白いなっていうことを、別に何かを見てとかじゃなくて、急に思いついたんです。最初に考えたのは、客入れからずっと猫背(椿)さんが監禁されてるんだけど、監禁したくせにみんな「この女、帰らないかなあ」と思ってるみたいなの、とちも得しない話が出来ないかなって思ってた(笑)。

この話には兄妹が出てくるんですけど、兄妹とか血のつながりがある話って、これで初めてやったんです。最初はいろんな仕事をしてる人たちが、ある場所に女の子を監禁してるのに、その女の子をほったらかしにして、そこに集まって違うことやってるっていう話にしようと思っただけなんですけど、それだとあんまりにもつながりが少ないかなって思ってた。設定をお寺にしたのは、松尾(スズキ)さんが住職だったから面白くなってるんですけど、そこから他の配役も考えていきました。伊沢(磨紀)さんは、結構ドライな感じなのに、いっぱいいい感じもある女優さんじゃないですか。一生懸命やってくれただけ(笑)って感じが面白いなあって思ってた。それで出たらうことになって、「二人を気持ち悪い感じの兄妹にしよう」と思っただけなんです。

前に、誰かと一緒にエロ本を読みながら、どの女の子が一番いいか「せうの」で指さして決めるっていうのをやってた時に、異常に盛り上がったことを思い出したんです。それで、そういうのばかりやってたら面白いかなくって思ってた。いい年してそういうことやってたら久々になんか燃える感じがあったんで(笑)、こういう感じをずっとやってるのも面白くなって。結構、ぶぶぬれの女が終ってから期間が短いついていうのもあって、同じ密室だけど、要素が少なくていうか、ヒマっていう状況で何かやるって思っただけなんです。今までで、きつなかつたんですよ。僕が要素をいっぱい盛り込んでいって、忙しい芝居になっちゃうんです。それで、みんなが夜中に集まって一言も話さないでエロ本読み始めて、監禁されてる女が、「あ、あたしどうすればいいんでしょう」みたいな誰にも相手にされないっていう(笑)。なんかそういう女が一人いるのが、いやらしいコトをしなきゃいけないっていう気持ちになって、それで意識しちゃうみたいなの、そういう話にしようと思っただけです。女さえないければエロ本読んでただけでよかったのに、女がきつなかつたからどうしようっていう(笑)。毎回そうなんですけど、あんまり普通のお客さんは入り込めないですよ。結局誰にも感情移入はさせないんですよ。最後まで、誰か一人を追って芝居を観るっていうのがあんまり好きじゃないんです。一人の人を追って行くっていうコトに興味がないから、わりと俯瞰で見て、あの人のああいうところが面白いとか、わかるなあとかがあればいいなあって思ってます。この芝居だと、最初は猫背さんを追っかけていけばいいのかなって思っただけで、途中からちよつとおかしくなっていくし、それで(山本)密さんを追っかけて

いけばいいのかなって思ったら密さんもおかしいって、誰を追っかけていいかわかんないまま終わっちゃうっていうのが結構好きなんです。

中心にいて悩んでる役って、意外にやりがいがないんじゃない？って思っていて、みんなできまわしたほうがいいじゃないかっていう。そんな深くない考えなんです。もつとドラマにしようと思っただけで、監禁されてる人が殺されちゃうとか、やられちゃうとか、そういうのがあればいいのかもしれないけど、そういうのやなんですよ。なんか、当たり前の方向に行っちゃうのが面白くないというか、みんなダメになっちゃうほうがいい。

正しい、この中のルールを作りたいんですよ。「ニッキー」で言えば、普通に女とつき合うことができない奴らばかりの中に放り込まれて、そういうのを見るうちに、そっちが正しいような気がしてくる。そういう風に引き込またいんですよ。一本の芝居の中のルールというものを決めたいというか、それは別に道徳とかとは関係ないし、この舞台だけに成立するルールですね。僕も別にそうは思っていないし、僕が思ってることをやればいいんだけど、それでもないことをやっちゃうからわかんなくっちゃうんです。猫背さんにオッパイ出してもらっただけで、まったく問題なかったですね。僕が台本の書きに「オッパイ出す」って書いてたら、「えっ」って言われて、「お願いしますよ」って言ったら「ハイ」って(笑)。すごい判断が早かった。その後いろいろ言われまして、もしこの本を誰かが上演するのであれば、あのシーンは絶対オッパイ出さなきゃダメですね。僕も随分いろいろ言われまして、もしいいのかわかんないか、猫背さんのオッパイ初めて見たときに、「俺、引かなくていいか」とか、笑っちゃうようなオッパイの人が笑っちゃうんですよ。なんか、猫背さん、引かなくていいか、何だろって思ってたんですけど、ゲネカ何かで一回見た時に、笑っちゃったんですよ。なんか、猫背さん、引かなくていいか、何だろって思ってたんですけど、それが意味深かったんですよ。オッパイ出して笑いをとるのは難しいことなんで、シチュエーションで笑わせることは出来ても、それはオッパイだから笑えるっていうのではないし、もうストレートにオッパイ出して笑いとりたいって思っただけなんです。結構それがやりたかったんですよ。まだ要素多いですけど、随分シンプルになりましたよ。本当にやりたいことを優先すればいいんですけど、全部やりたがるから(笑)。